

時間の点と線 駒田晶子

仙台駅に隣接しているテナントビルの一階に丸善はある。詩・短歌・俳句部門の書棚には、通常の書店よりも多めに、書籍が並べられている。先日、この場所に『冬野虹作品集』はあった。函入りの三冊なので横幅があり、多めに場所を取っている。装丁も垢ぬけているので、目を引いた。十年以上前に亡くなった著者は詩・俳句・短歌を作り、絵を描き、舞踊にも親しかった。真つ白な地に、金や深い小豆色でバランスよく配置された文字や絵に、作り手のこまやかな配慮を感じる。冬野虹（一九四三～二〇〇二）の作品は、軽やかだ。

- ・ 三月や麒麟の夢を指にまき
- ・ 花ふぶきわらつてわらつて空の席
- ・ 雪の香やとちこめられる否の声
- ・ 向日葵のきんいろの翼包まれて山手線を運ばれてゆく
- ・ 流水に素麵洗ふゆぶぐれのわたくしの掌を離陸するもの
- ・ 晚白柚香る夕べの月の出に蛇口の栓を右にまわしぬ

第一巻は俳句、第二巻は詩、第三巻に短歌や歌詞、文章が収められている、全三冊の集成。日本語独特の湿り気のようなものが希薄だ。詩の心は軽やかに、短歌と俳句の定型を舞い、浮遊している。著者は、この集成を編集・出版した夫・四ツ谷龍氏とホー

ムページ「インターネットむしめがね」を日・仏・英の三ヶ国語で開設していた、と年譜にある。作品すべてに湿度をあまり感じさせない。著者の資質はもちろん、言語感覚にもよるのかもしれない、と思う。第一句集『雪予報』の序に、四ツ谷氏が記しているように、著者が関西の出身なのも、無関係ではないだろう。作品はあくまで詩的であり、作者の実生活が垣間見えることは、ほとんどない（夫や父、亡くなった姉が題材になったりもしているが）。短歌という分野は、実生活が滲みやすい。一作者が長期的に詩的表現だけを追求していると似たような印象の作品が並びやすく、読者にドラマ性を与えにくくなるからだろう。社会性を帯びさせやすいことは、大きな出来事が起こってから、新聞に投稿される短歌作品群を見れば、あきらかだ。日常生活の中の詩のエッセンスのみを掬いといったような著者の集成を読みながら、「どのような立ち位置で自分の表現をつくるのか」という姿勢を考えた。「心の花」1400号記念号が届いた。「心の花」先輩歌人名鑑は圧巻だ。今まで知ることができなかった歌人、写真、作品に触れることができ、とてもスリリングで充実している。個人の写真に許可を頂戴し、掲載するまでの大変さを感じる。この名鑑を基に、気になる先輩歌人の顔を思い浮かべながら、歌集を手にしたりもできるようななるだろう。しあわせなことだ。名鑑をめくりながら、短歌ひとすじではなく、異なる分野にも充実した足取りを残した人が、歌をよみつづけていたのだなあ、と気づく。華やかな経歴ではないけれど、「心の花」を実直に支えつづけてくださった方々も、多く。1400号という数。あらためて、かさねられた時間の厚み、関わってきた人の存在をありがたく思った。